

研究発表要旨

戦場と本：開高健『輝ける闇』に見る言語の交錯

藤田 晃代

開高健（1930-89）によるベトナム戦争三部作の初作『輝ける闇』（1968年）は、作家自身がモデルと思しき従軍記者の一人称によって語られる作品である。開高健は、従軍記者としてベトナム戦争の前線を取材中、同行カメラマンの秋元啓一（1930-79）とともに九死に一生を得る経験をしたことをルポタージュ『ベトナム戦記』（1965年）に記録しているが、『輝ける闇』には同ルポで取り上げた題材をもとにした作家の言語に対する追求姿勢が見られる。その一つが戦場における本の役割にみられ、非常時の海外で生きるために主人公が多言語を使って意思疎通をする姿に描かれている。南ベトナムのサイゴン（現在のベトナム社会主義共和国、ホーチミンシティ）にやって来た主人公は本を携え、仕事の傍ら読み続ける。前半で主人公はアメリカを代表する作家マーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）作『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1889）を読み、戦局について思索を重ねる。また、主人公は英語をはじめ、フランス語、片言のベトナム語そして漢字による筆談も用いて意思疎通を図り、表現者としての力を最大限駆使する。本発表では、『輝ける闇』を中心に作中での本の役割と主人公の多言語使用の意味、さらに戦争報道といえば映像および写真が主流となっていた時代に作家が言葉で表現したことの意義を考える。考察にあたってはまた、34歳の若さで殉職した報道カメラマン、沢田教一（1936-70）による特報記事も取り上げ、言語表現に関して開高健のそれと比較考察を行う。

19世紀初頭イギリスのドイツ文芸書の英訳版の受容—『ウォラドモル』の事例を中心

小林 英美

グリム童話のドイツでの評価が、イギリスでの英訳の評判によって好転した事例が示すように、19世紀初頭においては翻訳が、その書評とともに、国境を越えて大きな影響を及ぼすようになっていた。その事例研究として、本論は18世紀末の好古趣味の文芸作品の交流を端緒にして、ウォルター・スコット（Walter Scott）作品の翻訳と偽ったウィリボルド・アレクシス（Willibald Alexis）の『ウォラドモル』（*Walladmor*, 1825）の事例等も取り上げる。この作品はトマス・ディ・クインシー（Thomas De Quincey）による英訳が書評された。なお定期刊行物での書評は、広告媒体としての役割も有しており、それを所蔵していた各種図書施設の状況と影響力についても付言することになる。つまり翻訳の方法論というよりも、翻訳とその書評が作品の伝播で果たした役割を主眼においた報告となる。

『貧しい娘たち』—なぜ改宗したニコラスはジェインの姿を回想するのか

加藤 良浩

ミュリエル・スパークの『貧しい娘たち』（*The Girls of Slender Means*, 1963）では、「メイ・オブ・テック・クラブ」と名づけられた女子寮に住む、「利他的」で「健康そう」に見える、まさに善を象徴するかの如きジョアンナ・チャイルドと、外見の美しさとは裏腹に、「自己中心的」で悪を象徴するかのようなセリーナが描かれている。そしてこの二人に、出版社に勤務するジェインが加わるが、無政府主

義者で、無神論者であるニコラス・ファリンドンは、彼女たちの中でもとりわけセリーナに魅了されていく。しかし、結局彼女の悪に気づいた彼は、それまで無信仰を改めカトリックに改宗するのである。この行動をもたらすに至った彼の心の変化は何を意味するのであろうか。

またニコラスは、日本降伏の晩、熱狂した群衆の中でバッキンガム宮殿の片隅の黒い草むらの上に、がっしりと立つジェインの姿を目にする。後に彼はハイチに赴き、そこで殉教の死をとげるのだが、その地でなお彼が数年前に目撃したこの彼女の姿を回想するのはなぜなのだろうか。

本発表では、作品の中に描かれる登場人物の性格描写を検討することを通して、これらの疑問に答えることにしたい。

品詞の連續性と構造の連續性—学習英文法を支える理論的基盤 大野 真機

本発表は「品詞の連續性」、およびそれと呼応する「構造（補部と付加部、あるいは目的語名詞句〔節〕と形容詞・副詞句〔節〕）の連續性」を、学習者の認知において相互に支え合う二側面として捉え直し、英語教師の Pedagogical Content Knowledge (PCK) の一部として位置づけることを目的とする。従来の学習英文法は、品詞区分や補部／付加部の二分法に基づき、説明の簡潔さを優先してきた。しかし、句動詞を形成する不変化詞の統語的挙動や文脈依存的な場所・方向を表す前置詞句の目的語性といった二分法では割り切れない現象に直面した際、指導の指針が揺らぎ、「慣用」として暗記に委ねられる場面も少なくない。本発表では、語彙的情報の完結度（意味的自律性）に起因する品詞の連續性と、構造上の補部－付加部の連續体に注目し、両者が同一の原理の表裏として統合されうることを示す。そのうえで、これらの知見を教師固有の専門知（PCK）として再構成し、①学習者がつまずきやすい典型的ポイントの可視化、②説明レパートリーの拡充、③作問および設問検証における一貫した判断基準の提示という観点から、メタ学習英文法の教育的有効性を検討する。

連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

本シンポジウムの趣旨

連続シンポジウム発起人 鶴崎 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるようだ。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発

表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 26

小中高までの英語教育と大学での英語教育を考える—音声教育に焦点を当てて—

篠崎 剛

音声教育の話に入る前に文法教育について触れておきたい。数年前に施行された中学校の学習指導要領から仮定法まで指導の範囲に入った。これまで高校で英文法の一通りを学習していたが、それが前倒しされた。高校では中学校で習ったことの定着を図ることになった。そして『総合英語』を冠する参考書を使用し、英文法の大半を学習した錯覚に陥る。が、世には、大学で習う英文法を示唆する文献が存在する。加えて高校で習う学校文法以上のことことが書かれた文献も多くある。このようにして文法教育は中高大とレベルアップしながら繋がっている。

一方、音声教育はどうだろうか。初期の段階ではフォニックスを取り入れた学習が行われているが、文法教育のように理論的に音声を指導する場面はほぼない。現在、発表者が使用している論理・表現の教科書には 1 レッスンにつき数行ではあるが、音声学レベルの内容が書かれている。このようなものが、これからその裾野を広げていくにはどうすればいいか。そして高校教員としてどこまで音声教育をしていけばいいのかを考えたい。

発題者 27

5 文型を考える—中高における文型教育試論（私論）—

中澤 和夫

中学校や高校の教室で英語を教える際に、文型という用語を用いるのは避けて通れないのではないだろうか。さらに文型を持ち出すとなれば、ほぼ必ず 5 文型に触れざるを得ないのでないのではないかと思われる。今回の私の話は、いわゆる 5 文型を私自身どう捉えているか、さらに私自身が中高の教室の現場に立ったならば、5 文型をどう教えるか（教えたらよいか）についての試論（私論）である。結論的に述べるならば、5 文型というものは、かなり鷹揚に融通無碍に扱ってよいものではないか、もっと言うなら、あまり厳密に考えるべきものではないのではないか、ということである。教室で重要なのは、あくまで与えられた英文を正確に解釈できるように導くことであって、5 文型はそのための補助線のようなものであると思われる。（念のために記すが、教室における英作文や英語の口頭練習も、不要ではなく、もちろん別途必要であり重要なのは言うまでもない。）

なお、本発表は拙稿「5 文型を考える」（中澤・大室（共編）『学習英文法を見直す』（シリーズ英文法を活かす 第1巻）、開拓社（2025）、76-93 頁）の内容を踏まえたものであることをお断りしておきます。